創造性と寛容性で創る、浜松の未来像「創造都市」。

静岡文化芸術大学文化政策学部教授 **片山泰輔**

文化政策研究の第一人者であり、浜松市の創造都市実現のための取り組みに関わりながら、静岡文化芸術大学で教鞭をとる片山泰輔教授に浜松が目指す「創造都市」についてお話を伺った。

創造都市とはどんな都市をイメージすればよいのでしょうか

創造都市は、人間の創造性を生かすことで、都市の持続的な発展に必要な産業活動や、まちづくりといった、社会システムを持続的に発展させていくことができる都市です。それには、創造的な人材が集まってくるための街の環境や機会を整え提供することが必要です。集まってきたその人たちが創造的な産業、まちづくり活動をすることで、都市の魅力が備わっていきます。そして、市民やビジターが街を回遊し、それらの活動に触れ、刺激を受けることにより、ますます創造的な都市に発展するのです。

創造都市・浜松の実現に必要なことは何ですか

『浜松には農村と郊外しかない』などと言われます。浜松の中心地に人通りが少なくなり、都市の色が薄れてしまっています。車でお店や施設に来て用が済むと、歩道を歩いたり、隣の店に立ち寄ることすらせずに帰ってしまいます。お店の入り口は車を意識して駐車場側に向いています。国内外のアーティストや科学者、研究者が浜松を訪れても、駅から目的の場所に車で行って、お互いが交流することもなく、用が終われば帰ってしまう。これらは、都市の集積が十分に作れていないということで、一番の課題です。静岡文化芸術大学もその課題を解決するために中心部に創立されましたが、大学街としてのにぎわいをつくりだせていないのが現状です。また、多文化共生が掲げられながら、電車やバスで外国人と偶然隣り合わせになるといった日常的な接点の場もあまり多くありません。浜松ぐらいの大きな規模の地域であれば、多様な人同士の偶然の出会いを演出する都市らしい集積機能が必要です。都市が持つべきこれらの本来の機能や魅力が備われば、市民の生活や産業に活力を与えます。

そのためにはどんなことが重要になりますか

公共交通機関を充実させ、車中心のハードを改めなければなりません。その前提として市民の生活の質と都市に対する価値観を変え、ライフスタイルを見直すことも新しい浜松のまちづくりには必要な要素だと思います。

また、産業については、構造的な変革が必要です。かつての「ものづくりで稼いで、文化を買って消費する」から「文化を創ってそれを売って稼ぐ」スタイルへのシフト。製造業中心から、専門的サービス産業中心の産業構造に変えていくこと。職業構造では工場での組み立て型から企画やデザインをはじめとした、専門的技術的職業や企画デザインの人が集まることが重要です。

お手本、モデルとなる都市はありますか

国内都市では強いて言えば神戸市でしょうか。近代型の産業で発展した街が、震災以降、クリエイティブな力、NPOの活動や市民の力を発揮して、復興からのまちづくりに取り組んでいます。ユネスコ創造都市ネットワークデザイン都市（p3参照）にも認定されました。

浜松には、世界トップレベルの楽器製造技術の蓄積もありますし、伝統芸能や文化財も多く、自然環境にも恵まれ、市民の文化活動に対する意欲もあります。創造都市としての潜在能力を持っている地域ですので、条件を整えていけば、将来、浜松が創造都市としてのモデルになり得ることも考えられます。

実現までにどのくらいの時間がかかりますか

世界的にみると何十年かけて進めていく取り組みです。浜松は、ようやくスタートラインに立ったレベルです。ひとつの目安は、世代交代の時期と考えます。現在の若者、例えば文芸大の学生が40代、50代になった頃。高齢化がさらに進み、車を運転しない世代が増えていると予想されます。高齢者も安心して街に出て来られたり、若者も楽しめたりできる都市がイメージされます。

最後に、片山教授は、「創造都市の実現には、変わったもの、奇抜な人を取り込める社会構造が必要となりますので、創造性とともにそれを受け入れる市民の寛容性（tolerance）が問われる施策といえます。創造都市は同じような価値観やライフスタイルの人同士が暮らす社会を好む人々にとっては必ずしも快適な都市ではない、という点を冷静に認識することが重要です」と語った。新しいものや来訪者を受け入れるおおらかさ、とにかくやってみようという『やらまいか』の気質は、創造都市のスタイルに相応しい市民性と言えそうだ。

片山泰輔
静岡文化芸術大学文化政策学部教授・同大学院文化政策研究科長
専門は財政・経済、芸術文化政策。主な編著書に『アメリカの芸術文化政策』日本経済評論社、『アーツ・マネジメント概論』水曜社等。公職に、日本文化政策学会副会長、文化庁文化審議会文化政策部会委員等。